

当別文芸の会だよりNO.99

H31・2/25 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

2月の読書会は吉村昭の「罽嵐（くまあらし）」でした

1月後半から2月にかけて、猛吹雪や記録的な寒波が到来。じっと耐えるしか術（すべ）がない現実でした。それに前触れもない昨秋の胆振東部地震の余震。震度3から4の揺れに、またかの思いでした。

その後は、気温が3月中旬並みの日が1週間ほど続く天気予報。春の訪れが待ち遠しい今日この頃です。

そんな桃の節句も近い、好天に恵まれた今年度最後の読書会が、2月23日（土）白樺コミセンで開催され、会員10名のみなさんが参加されました。

この日の司会進行は、監査の久保義雄さんに。早速、吉村昭の「罽嵐」の読後交流となりました。

吉村昭の作品は、これまで、月形集治監の囚人「赤い人」を取り上げたこともあり、史実の取材やその文章にも定評があり、みなさんも読みやすかったようですが、北海道の明治、大正期の開拓が、どれほど大変だったかのようすが、生々しく伝わってきました。

そのなかで、大正4年（1915）12月に起こった、留萌管内苫前町・三毛別の開拓集落を襲った罽（ひぐま）が、わずか2日間で六人の男女を殺害した事件の詳細は、実に衝撃的で、読んでいても恐怖感が充満し、みなさんもそれをこらえるのには大変なようでした。

地域の住民や所管の警察署など、大勢の人たちがその罽を捕えることに翻弄されたが、結局、その罽を捕えたのは老練の猟師で、捕えた罽の体重は102貫（383キロ）。また、その事件の結末も、考えさせられるものがありました。

話が発展して、野生動物とどう共存していくかなど、話題の尽きない読書会で、今年度の活動も無事終わることが出来ました。みなさん、ありがとうございました。

読書会終了後、16:00から「文芸交流会」（久しぶりの飲みニュケーション）をパークレジデンス3F（園生）で開催し、9名のみなさんの参加をいただきました。和気あいあいでも弾み、今後の活力につながれば幸いです。

当別文芸の会（10年次）の「総会・文芸交流会」

4月27日（土）11:00 会場は田西会館（交流会会費・1000円）です。

当別文芸の会だよりNO.100

R1・5/10（連絡先・河地良一 Tel090-5076-2550）

平成31年度（令和元年度）・当別文芸の会（10年次）総会

5月1日から新しい元号になりましたが、4月27日（土）、田西会館（弥生）を会場にして、11:00より平成31年度（第10年次）の総会・文芸交流会が開催されました。今回、遠藤郁子さん（スウェーデンヒルズ在住）が入会され、会員は18名に。うち当日は16名のみなさんが参加されました。

進行は副代表（兼幹事長）の竹原一孝さんをお願いし、あいさつに続き、提案は代表の河地が担当。平成30年度の活動報告、会計決算報告と「当別文芸」（第8号）の発刊、会計報告がなされ、監査の久保義雄さんから監査報告があり、会員みなさんから承認をいただきました。

つづいて、平成31年度（令和元年）の活動計画、予算案、「当別文芸」（第9号）の編集についても承認をいただきました。本年度は年間6回の開催とし、読書会が4回、文芸シンポジウム（10月）、文芸交流などを予定しています。

なお、監査は安榮敏子さんが辞任し、後藤まゆみに後任をお願いし、そのほかの世話人は（会則では2年）留任で、会の運営（お世話）にあたっていただくことになりましたので、よろしく願いいたします。

総会に引き続き、昼食懇談となり、その後、研修担当幹事の東前寛治さんの司会進行で、代表の河地が「もう一度、人生の学び直し＝わたしの最近の読書感想から」と題して話題提供を行いました。

元号も変わり、天皇の「生前退位」は江戸時代後期の光格天皇以来（1817年）のこととかで、日本の歴史の中での「天皇制」についても、元号と併せて、今後、各自の判断に任せるが、話題になっていくのかもしれない。ともあれ、新しい時代の展望を見つけなければならないことだけは、確かなようですね。

5月の読書会案内

5月25日（土）13:30より、会場は白樺コミセンです。

読書本は、幹事の新名正勝さんの推せんで、奥田英朗（ひでお）著の「向田理髪店」（光文社文庫）です。先にお渡しした文庫本をお持ちください。

著者は、昭和34年（1959）、岐阜県の生まれで、平成16年（2014）に、第131回直木賞ほか、多数の受賞作のある作家です。今回の作品は、北海道の過疎の町の様々な騒動と人間模様を、温かくユーモラスに描いた連作集です。